

# 山武郡芝山町古宿・上谷遺跡の再検討

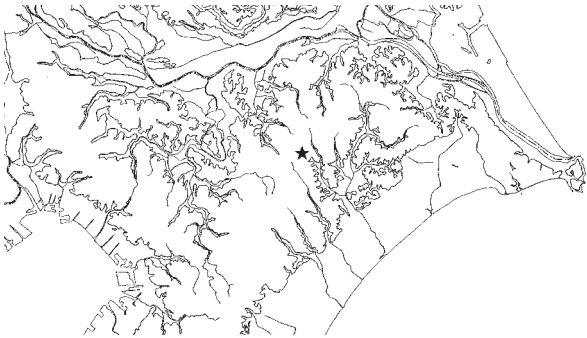
－小規模集落の分析にむけて－

加 納 実

## はじめに

ここで分析をおこなう古宿・上谷（フルジュク・カミサク）遺跡は、千葉県山武郡芝山町岩山字古宿に所在する。新東京国際空港の南に近接し、空港を境に成田市に接する。

鮭回帰の南限の川として知られる栗山川は、下総台地に源を発し太平洋に注ぐ。この栗山川支流の高谷川最上流の、さらなる支流によって開析された小支谷に

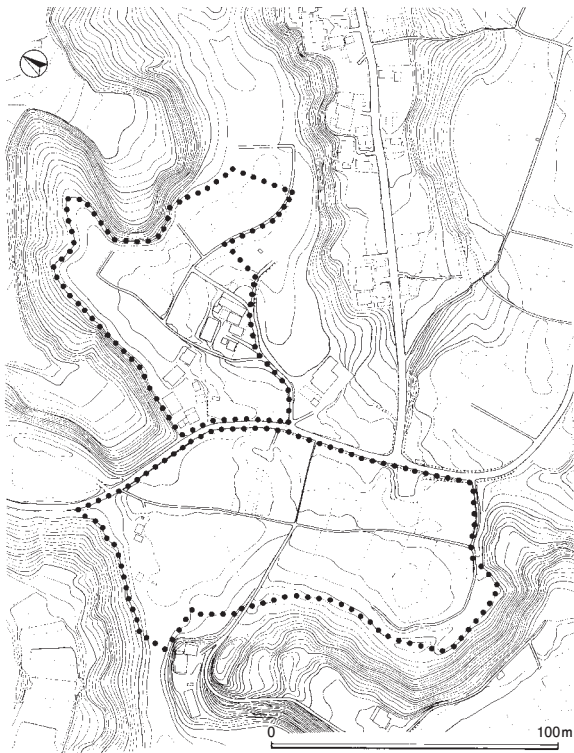


第1図 古宿・上谷遺跡位置図

面した、標高42m前後の台地上に遺跡は立地する。太平洋側に向かう水系の最奥部に位置し、栗山川河口からの直線距離は約18km、九十九里平野に接する下総台地端部からの直線距離は約8kmである（第1図）。

同水系の下流域及びその周辺域での中期後半の遺跡としては、居合台遺跡（（財）山武郡市文化財センター1995）・境貝塚（境遺跡発掘調査団1980）・中台貝塚（（財）千葉県文化財センター1982）・東長山野遺跡（北長山野遺跡調査会1990）などが知られる。なお、高谷川水系北側の根木名川流域には長田雉ヶ原遺跡（（財）印旛郡市文化財センター1989）がある。

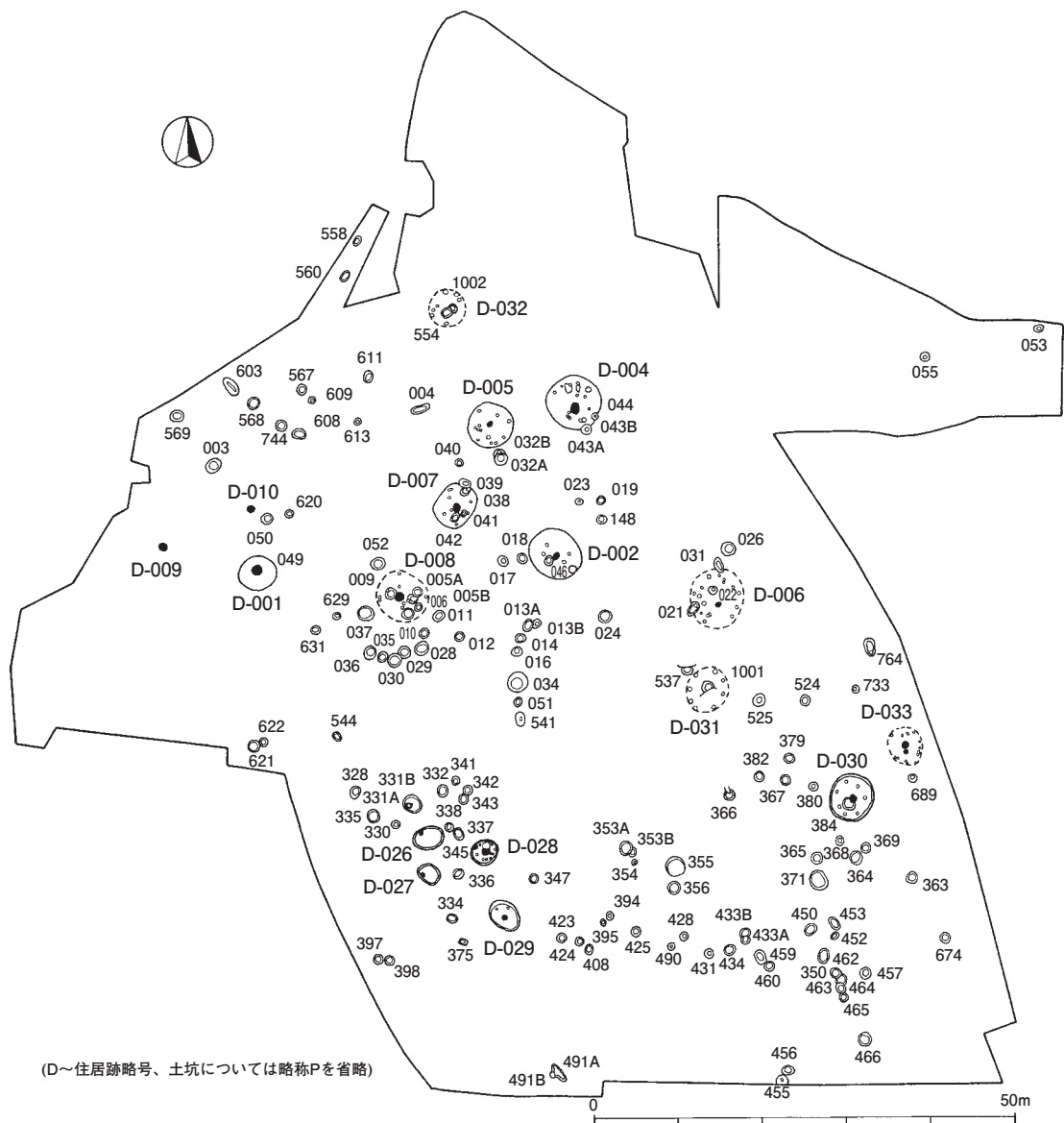
古宿・上谷遺跡は1984（昭和59）年～1990（平成2）年に（財）千葉県文化財センターが発掘調査を実施し、確認調査対象範囲（第2図）での確認調査結果から決定されたA～Dの各地区の本調査範囲（第3図）により、台地平坦面上の大半の状況が判明したと考えられる（（財）千葉県文化財センター1998）。



第2図 古宿・上谷遺跡確認調査対象範囲



第3図 古宿・上谷遺跡本調査範囲と調査区名称



(D～住居跡略号、土坑については略称Pを省略)

第4図 A地区遺構配置図

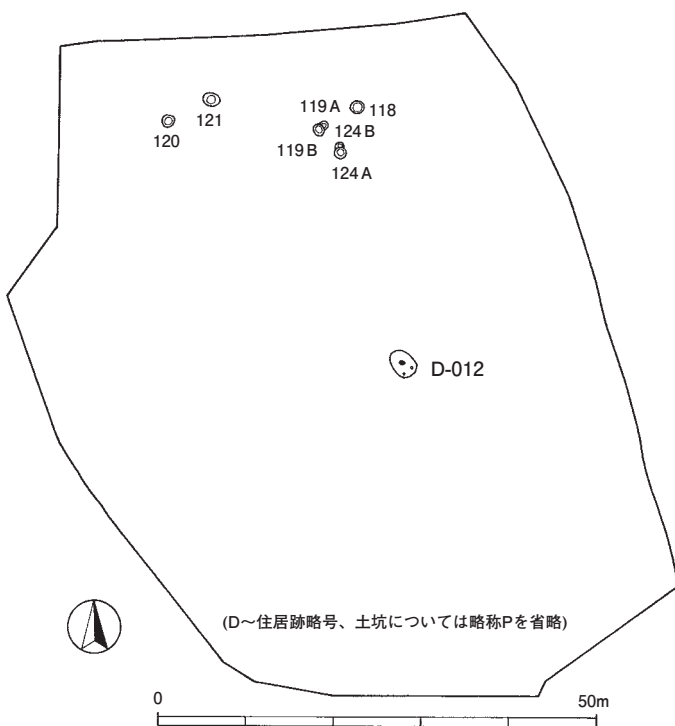
### 1 遺構の概要

#### 【住居跡】

調査範囲から発見された縄文時代中期後半の住居跡としては、A地区（第4図）・D地区（第5図）において、概ね加曾利EⅢ式期に属すると考えられる、もしくはその可能性を捨てきれないもの18軒がある。

これには単独の炉跡として調査されたD-009・D-010（第8図）も含めている。両者は出土土器が極めて少なく遺構の時期決定は困難であるが、共に加曾利EⅢ式期以降の住居跡の特徴である、壁高が極めて低く調査段階で壁を確認できない点、柱穴深度が極めて浅く調査段階で柱穴を認識できない点（加納1995）などを考慮した結果の措置である。

上記によりA地区での17軒と、D地区での1軒（D-012）を分析の対象とする。うちA地区のD-027については、出土土器のうち図示された3点が後期中葉に限られ、住居跡であると断定する根拠が希薄であるが、加曾利E式期の可能性を捨てきれないものとして、分析の対象とした（第1表）<sup>1)</sup>。



(D～住居跡略号、土坑については略称Pを省略)

第5図 D地区遺構配置図

なお、B・C地区からは縄文時代の住居跡は確認されていない。

### 【土坑】

調査範囲から発見された土坑の基数は、報告書の抄録によれば140基で、このほか陥穴17基がある。分析に際しては報告書の図・写真・事実記載から土坑149基として再編成し、第2・3表に示した<sup>2)</sup>。

土坑の設営時期については、中期後半の出土遺物が希薄もしくは欠けるものや、中期後半以外の遺物が出土している例が散見されるが、報告書の抄録での「中期末の集落遺跡のほぼ全域を調査している。13軒の竪穴住居跡と140基以上の円形土坑群によって構成される」との記載のとおり、これらの土坑群が概ね中期末に属するものであるとの認識に準拠しておきたい。

## 2 土坑分析の視点

土坑の分析について、基礎的な把握である規模について、深度と底径の関係を第6図に示した。底径が深度にまさる土坑群が主であり、深度約50cm以下、底径約100cm前後がやや多く、明確な分布の偏在は認められない。

一覧表（第2・3表）の項目設定について、

「フラスコ状土坑と捉えた根拠」は、報告書の「事実記載」・「写真図版」・「実測図」からフラスコ状土坑と筆者が判断したもので、その旨を記した。「事実記載」とは、報告書の事実記載中に「オーバーハング」や「袋状」といった表現が用いられているものである。土坑掘削（設営）当初は、貯蔵物の温湿度管理のためにフラスコ状を作出していたと想定したために設けた項目である。

「覆土の状況」とは、主に、「自然堆積により埋没し

たとは考えられない状況」を記載した。報告書の土層断面や事実記載から判断した。

やや詳細に解説すると、覆土が「単一層」・「ロームの混入無し」としたものは、例えば一定の深度を有する土坑が風雨等により周辺の土砂が流入し自然堆積していく過程を考えると、堆積土は単一ではなく、ローム粒・ローム塊をはじめとする様々な混入物も多いのではないかというという想定の下では、単一層の堆積は選択された土砂が人為的に投入された可能性があるとの判断である。

「上層にロームが多い」状況とは、壁面（地山）のロームが自然崩壊により覆土と化していく過程を考えると、地山のローム層レベル以上にロームが自然に堆積する状況は考えがたいことから、ロームは人為的に投入された可能性があるという判断である。かつて筆者が「壁面の地山のソフトローム層・ハードローム層よりも上位のレベルで、ソフトローム系の覆土やローム塊が堆積している場合は、その部分は人為的埋土層である可能性が高いのではないか」とした想定である（加納2012）。

「坑底面の状態」とは、かつて筆者が「墓坑に、掘る→葬る→すぐ埋める、という工程を想定した場合、開口期間の長い貯蔵穴に比べて、墓坑は土坑の底面や壁面の風化は少なく、底面・壁面の凹凸が目立つのではないか。すなわち壁面と坑底面、とりわけ坑底面の凹凸の有無（平坦であるか否か）は、ひとつの目安になるのではないか」とした想定である（加納2012）。なお本遺跡の土坑において、底面が平坦か凹凸かの判断は、報告書の事実記載に表現されたものに限る<sup>3)</sup>。

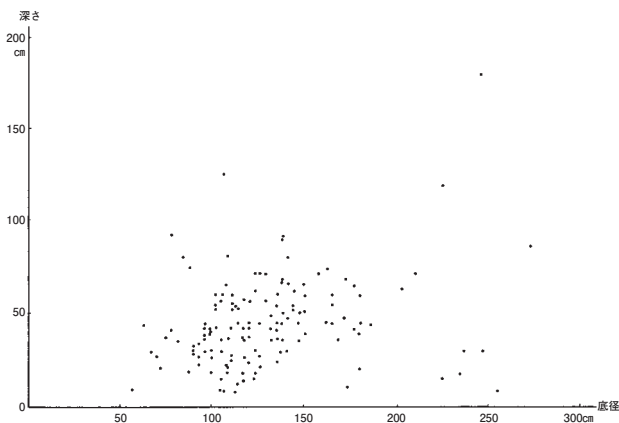
「堆積状況」とは、報告書の事実記載中に、「埋戻し」・「自然堆積」と記載されたものである。

「土器等出土状況」とは、報告書の事実記載の中で注意を要する記述を取り上げた。土器の出土量が卓越する例や、大形破片の出土などは、自然堆積の可能性が低いのではないかという判断である<sup>4)</sup>。

なお紙数の都合により、土坑分析の視点を設定にいたる経緯については（加納2012）を是非とも併読願いたい。具体的な遺跡における分析視点・分析例、及び理化学的分析の実例については、（加納1998）、（パリノサーヴェイ株式会社1998）に示しているの、これについても是非とも併読願いたい。

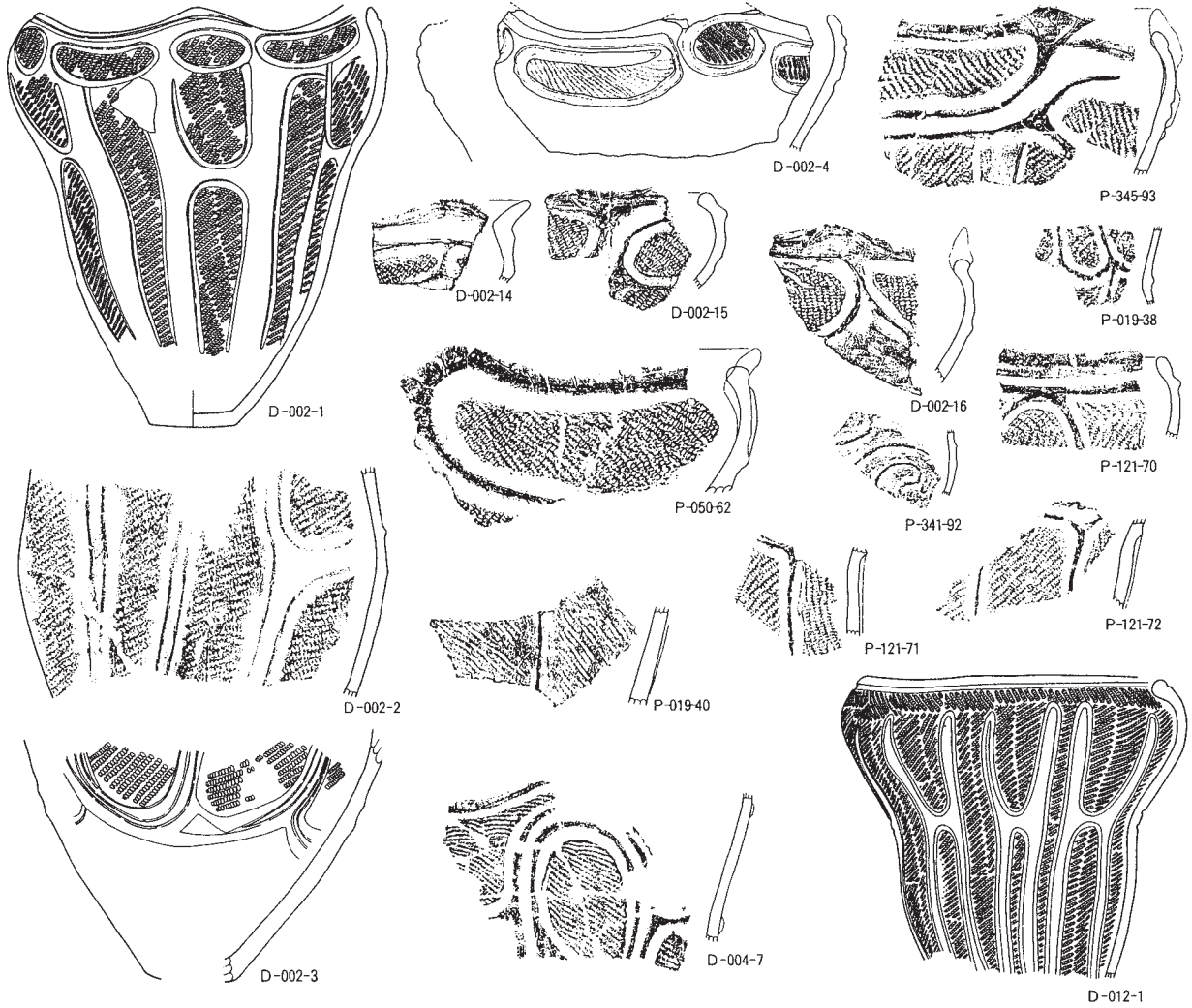
## 3 時間軸の設定

報告書では集落設営の時間幅について、I期からIV

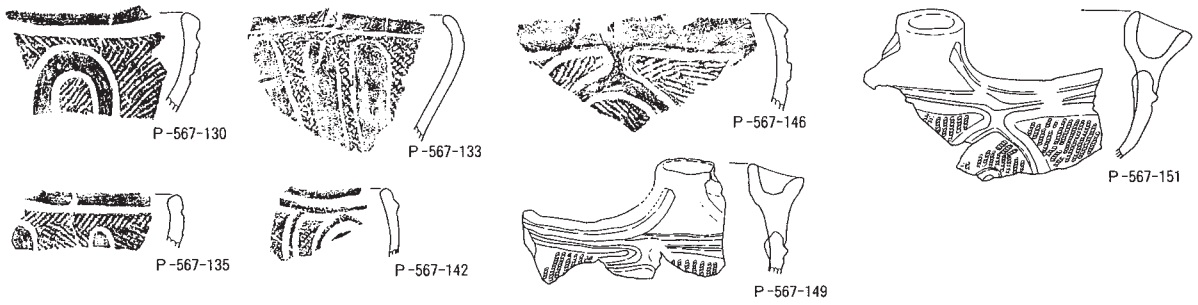


第6図 土坑の規模

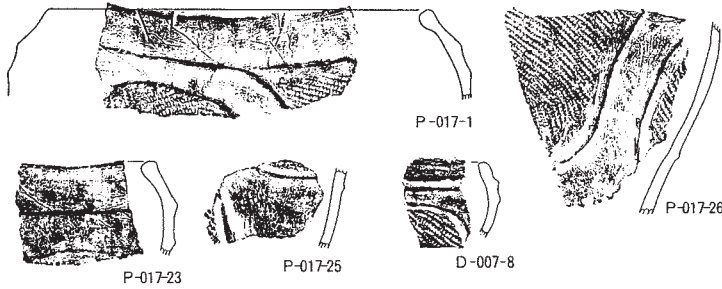
I 期



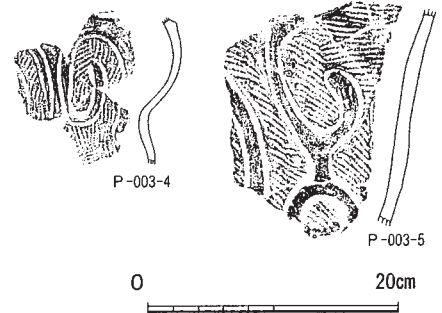
II 期



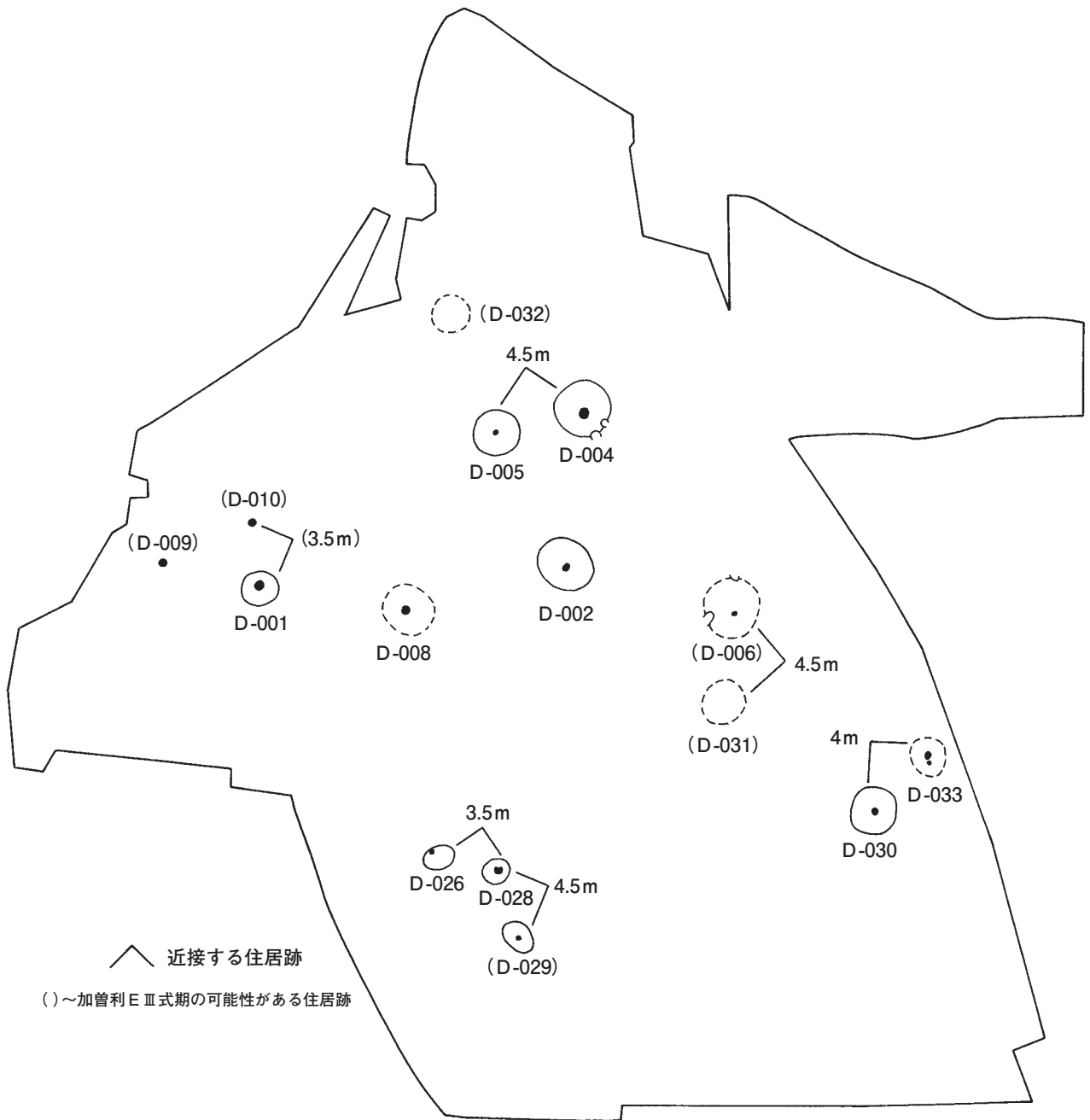
III 期



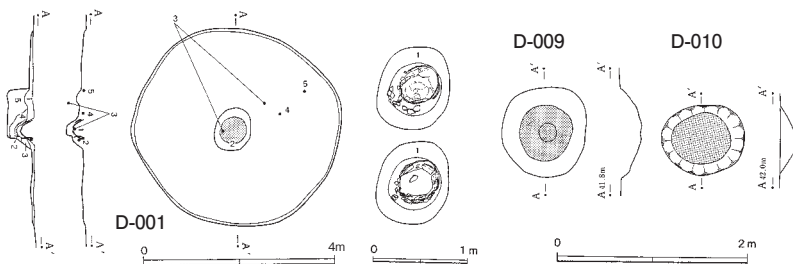
IV 期



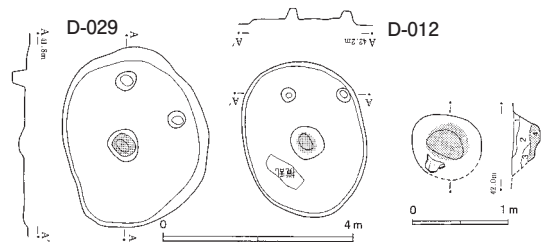
第7図 出土土器概要 (財)千葉県文化財センター1998より転載)



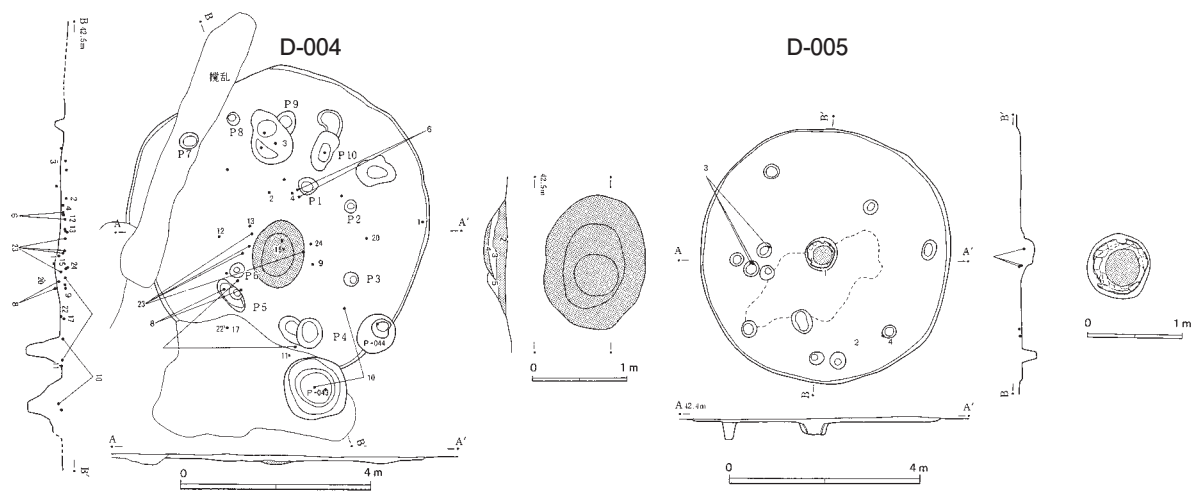
第9図 近接する住居跡・同時存在に疑問がある住居跡（加普利EⅢ式期及びその可能性がある住居跡）



第8図 D-001・009・010実測図



第10図 D-029・012実測図



第11図 D-004・005実測図



第12図 加曾利EⅢ式期新段階の遺構配置図

期の設定がなされている(第7図)。従前の編年(加納1989b)・(上守1992)をもとに、

I期 加曾利EⅢ式の古い段階

II期 加曾利EⅢ式の新しい段階

III期 加曾利EⅣ式に属する

IV期 後期初頭の称名寺式I式に属する

との記載がなされている。

筆者は、I期については報告書同様に加曾利EⅢ式期古段階、II期については積極的にI期とは分離し得ないもの、III期については明確に加曾利EⅣ式土器とし得ないもの、IV期については沈文系意匠充填系土器(加納1994)であり、加曾利EⅢ式期に属すると判断する<sup>5)</sup>。

以上の状況から、各住居跡の設営時期については表1のように整理した。加曾利EⅢ式土器古段階(報告書I・II・IV期)／加曾利EⅢ式土器新段階(報告書III期)という2細別である。

なお土坑の設営時期については、大局的な傾向を俯瞰することを主眼に置いていること、また土器出土量が希薄もしくは欠けるものが多く、加曾利EⅢ式期古／新との弁別が困難であることから、特段の操作以外では加曾利EⅢ式期として一括し、古／新の区分は避けた。

#### 4 住居跡の様相

##### 【D-001・D-009・D-010】

D-001・D-009・D-010(第4・8図)の関係を観察してみたい。D-001については、浅い掘込み(5cm程度)の堅穴で柱穴を有さない住居跡であるが、埋甕炉を有している。埋甕炉については炉の実測図でも明らかのように、土器の範囲内に焼土の堆積や被熱による赤化範囲が形成され、土器の範囲外はそのような様相が認められないという特徴を有している。

今、仮にD-001の埋甕炉が同一台地上での旧住居の廃絶に伴い抜き取られ、新住居へ移設・転用されたものとの仮定に立つならば、旧住居の可能性があるものは、同様の焼土等の分布を有するD-008(第17図)・D-012・D-029(第10図)が挙げられる(D-007は加曾利EⅢ式期新段階なので除外する)。しかし柱穴を有さない(もしくは明瞭に確認できない)というD-001の様相とは異なる。ここで注目されるのは、単独の炉として調査されたD-009・D-010(第8図)である。これらの焼土等の分布は埋甕炉の特徴を有している。またD-001が5cm程度の掘込みであるならば、住居廃絶後

の流失や調査段階での精査により、掘込みを確認し得なかったという可能性も高い。このように考えると、浅い掘込みを有し柱穴を有していないD-009・D-010からD-001への移動を想定できよう。

さらにD-010の堅穴をD-001と同様の規模を想定した場合、D-001・D-010は近接することとなり、両者の同時存在は考えがたい(第9図)ことから、この3軒の間において2場面<sup>6)</sup>の動きを想定することができよう<sup>7)</sup>。すなわち、

\*D-009→D-001という2場面(D-009とD-010は同時存在し得る)、もしくはD-010→D-001という2場面(D-001とD-009は同時存在し得る)

である。

なお、D-009とD-010との間の距離については、堅穴の掘込みを確認できないことから、不安定要素がつかまとうことは重々承知している。ここではD-009とD-010の掘込みについて、D-001と同程度と仮定し、報告書第5図に当てはめて計測したところ、D-009とD-010間の距離は約7m強、D-009とD-001間の距離も同様に約7m強であった。

##### 【D-026・D-028・D-029】

D-026・D-028・D-029(第4・10図)の関係を観察してみたい。これらはいずれも4m程度の不整楕円形プランの掘込みを有する堅穴である。D-028はD-026・D-029と同時に存在し得ない(第9図)と判断できるが、D-026とD-029は同時に存在し得る。このように考えると、最低でも、D-026・D-029とD-028という2場面の動きが想定できる。

ここで注目されるのは、D-029と、これらA地区の住居跡群とは100m以上の距離を置いたD地区の(第3・5図)D-012(第10図)との平面形・柱穴数・炉の位置の類似と、共に埋甕炉であったという共通点である<sup>8)</sup>。

ここにおいてもD-029・D-012の両者のあいだに、同一台地上での移動を想定すれば、

\*D-012→D-029もしくはD-026という2場面、あるいは、D-029→D-012もしくはD-026という2場面を想定できる。

D-012には埋甕炉の土器の残存が認められることから、D-012を移設・転用先と判断し、D-029→D-012というながれの可能性が高いのかもしれない。このように考えると、最低でも、

\*D-029もしくはD-026→D-012もしくはD-028、という場面

を想定することもできる。

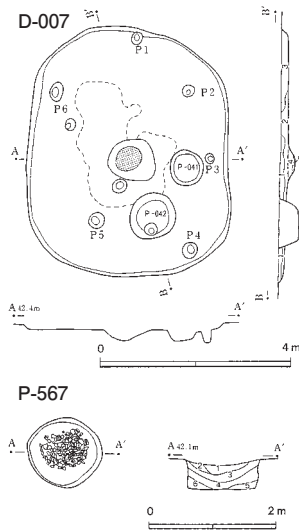
### 【D-004・D-005】

D-004・D-005の関係（第4・11図）について観察してみたい。D-004は炉に新旧がうかがえ、柱穴も重複していることから、最低でも1回の建替えが観察できる。このように考えると、D-004古→D-004新というながれと、これらとは同時存在しないD-005（第9図）という3場面を想定できる。

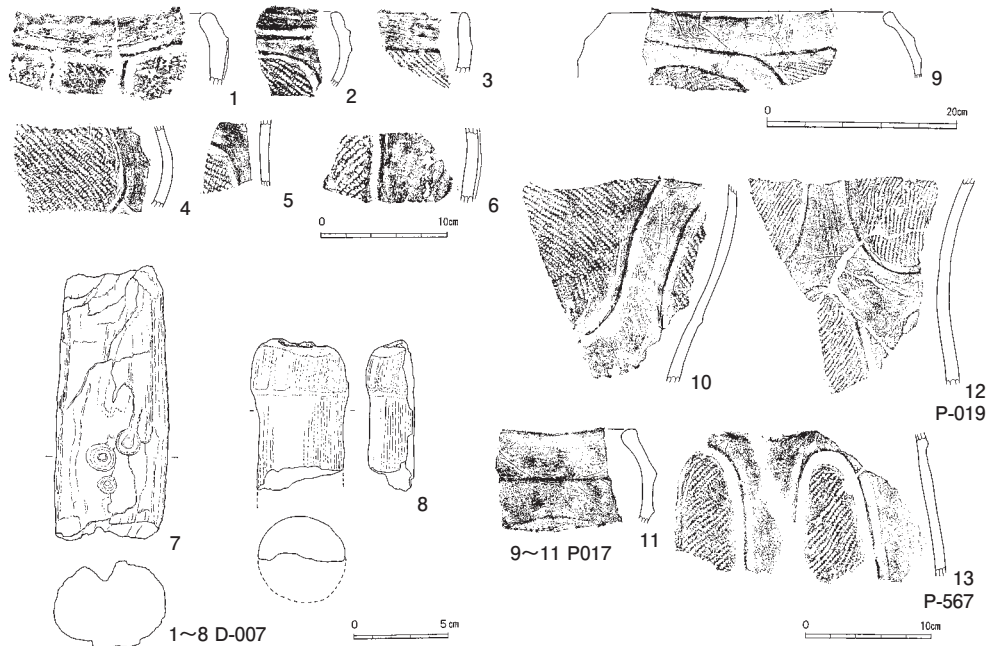
### 【その他】

D-030とD-033（第17図）の関係、D-006とD-031（第4図）の関係については、特に観察できる点はみあたらない。共に相互が同時に存在し得ない（第9図）2場面の動きを有するものである。

以上のように、D-001・D-009・D-010の観察、



第13図 加曾利EⅢ式期新段階の遺構



第14図 加曾利EⅢ式期新段階の遺物

D-026・D-028・D-029の観察から、加曾利EⅢ式期古段階という時間幅の中であっても、最低でも2場面の動きがあることを指摘できる。これに加え、D-004・D-005の観察から、やはり加曾利EⅢ式期古段階という時間幅の中であっても、最低でも3場面の動きがある可能性を指摘できる。

これに加え加曾利EⅢ式期新段階のD-007（第12～14図）を加えると、中期後半の小規模集落である古宿・上谷遺跡においては4場面程度の集落の変遷を示すことが可能であろう。

なお、D-002の炉における斜位土器埋設（第17図）、D-033における複構造炉（第17図）については、本稿における小規模集落の分析とは別に、社会的な位置づけについて示唆している（加納1995・2002）ので、是非とも併読願いたい。

## 5 土坑の様相

土坑の分析については、対象として再編成した149基について、報告書の記載及び第2・3表をもとに、第2表のように、

- ▲ “袋状・オーバーハング等” が観察できるもの
- “人為堆積・底面凹凸等” が観察できるもの
- “自然堆積・底面平坦等” が観察できるもの
- “不明”

と分類し、ふたつの要素を有するものについては、<印で示した（第15・16図）。

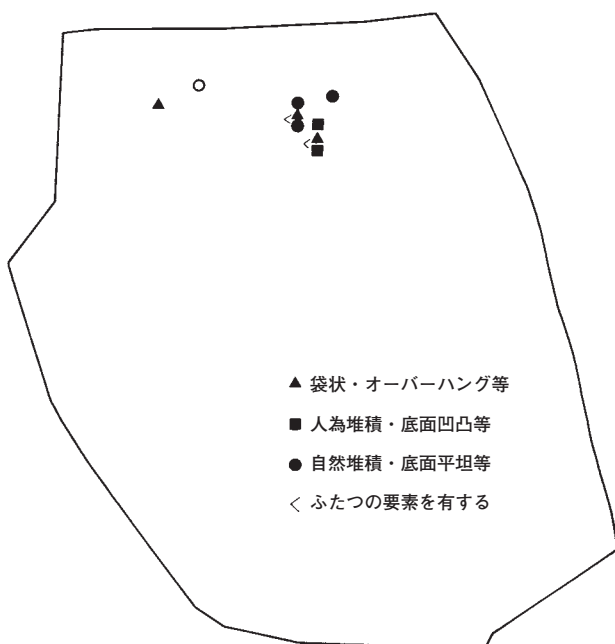
それぞれについて、機能を、

- ▲ “設営当初は貯蔵穴であった可能性が高いもの”





第15図 A地区土坑配置図 (加曾利EⅢ式期およびその可能性がある土坑)



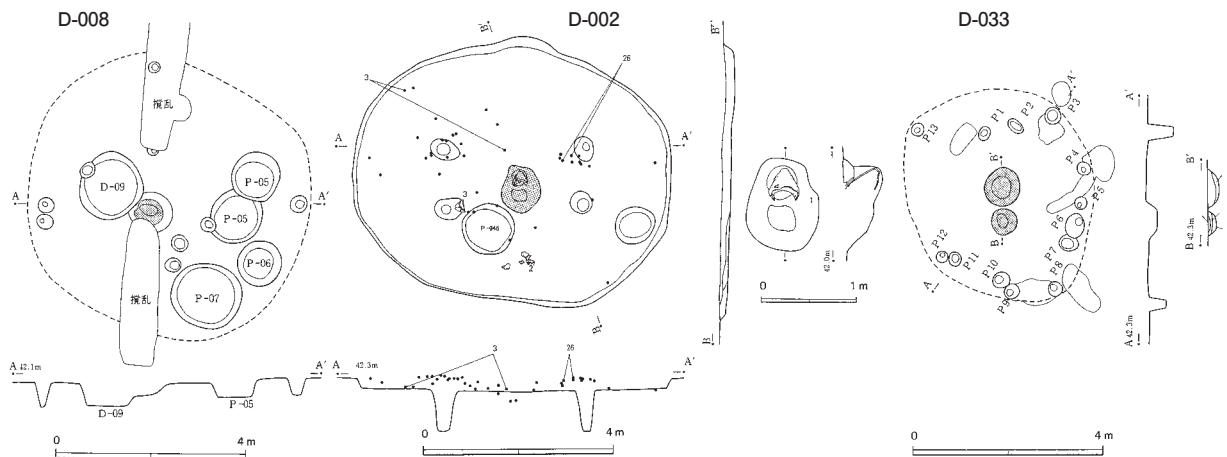
第16図 D地区土坑配置図

- “墓であった可能性が高いもの”
- “貯蔵穴として機能していた可能性が高いもの”
- “不明”

とやや強引にあてがった<sup>9)</sup>。

土坑と住居跡の位置的な関係や数量比（住居跡1軒に対応する土坑の基数）について、第4・15図から直接的に読み取れる情報は乏しい。しかしここでD地区の状況が大きな目安を与えてくれる（第5図）。すなわち、

- \* 土坑は比較的限られた範囲に散漫ながら集中する傾向がある
- \* 住居跡の位置と土坑の分布範囲には若干の距離がある
- \* 住居跡1軒に対する土坑の数は7基である
- \* 土坑の機能について、
  - ▲ “設営当初は貯蔵穴であった可能性が高いもの” 3基



第17図 D-008・002・033実測図

■ “墓であった可能性が高いもの”

2基

● “貯蔵穴として機能していた可能性が高いもの”

3基

○ “不明”

1基

となる(第16図)。

フラスコ状土坑の墓への転用などの想定から、機能の数と土坑の数は一致しないが、本遺跡のみならず、集落の分析に向けたひとつの目安となり得るのではないかと考えられる。

さてD地区での様相をもとに、土坑の“比較的限られた範囲に散漫ながら集中する傾向”を目安とし、第15図において機械的に、土坑の分布のまとまりを同一規模の円で括ってみると、筆者による先入観を除外した機械的な括りでは、7か所の括りを確認することができた。

住居跡のまとまり、すなわち【D-001・D-009・D-010】・【D-026・D-028・D-029】・【D-004・D-005】・【D-030・D-033】・【D-006・D-031】に加え、単独の【D-002】・【D-008】という7つの分布に対応する、“若干の距離がある”土坑群の、ほぼ同数の7か所のまとまり(括り)とも想定できるのではなかろうか。

各まとまり(括り)間での、総基数や、“設営当初は貯蔵穴であった可能性が高いもの”・“墓であった可能性が高いもの”・“貯蔵穴として機能していた可能性が高いもの”についての基数や比率について、共通する事項は残念ながら指摘し得なかった。

なお、加曾利EⅢ式期古段階に属するD地区の住居跡1軒・土坑群7基(第5・16図)と、加曾利EⅢ式新段階の属する住居跡1軒・3基の土坑群(第12図)

について、単純な比較によれば、土坑基数が半減している可能性があることは指摘しておきたい。ちなみに加曾利EⅢ式新段階の属する3基の土坑群(D-017・D-019・D-567)の様相は、いずれも、

■ “墓であった可能性が高いもの”

であることは注目されよう(第2・3表)。

## 6 小規模集落の分析にむけて

かつて筆者は柏市林台遺跡(井上1989)の分析(加納1985)を行うことになかから、限られた時間軸の内部での住居跡群の動態を予察として示してきた。その後、継続的な集落分析を為しえないまま、大内千年による優れた小規模集落の分析成果(大内1997・2006)などに啓発されながらも悪戯に時が流れた。

今回は、本稿のサブタイトルに「分析にむけて」という表現を冠したとおり、分析の結果に見えてくるもの提示ではなく、分析にむけて何をすべきであるのか、その方法の一例を示してきたところである。

住居跡のまとまり・住居跡の観察・土坑覆土の観察・土坑の分布に着目し、操作を行ってみた。そこでは、いくつかの強引な前提、すなわち、同一台地上での単位集団(住居)の移動、同時期に存在し得ない竪穴間の距離、土坑の観察、土坑覆土の解釈があったことを明記し、あくまで分析に向けた試行であることを明記しておきたい。本稿に示した試行そのものが、本稿を草した意図でもある。

かつて筆者は「加曾利EⅢ式土器(古段階)」という具体的な時間幅の中にあってさえ、複雑な“時間的展開”が繰り返されており、この時間的位相のなかで単位集団の内包する“社会的展開”が繰り返されており、下総台地で今日まで蓄積された多くの調査成果を

勘案すると、加曾利EⅢ式土器（古段階）という具体的な時間幅を対象を限定したところでも、社会変遷史の解明に関して、我々にいかに多くの命題が課されているかが痛感されよう」（加納1995）とした。この25年前の把握は今も変わることなく私の命題として目の前に立ちはだかっている。

個別の遺跡の、報告書で客観的に示された具体的な状況について、分析の視点を明確に示し、危うい方法は危ういものと明確に自覚し示しつつ作業を重ねていくことの中から、小規模集落の分析にむかうしか方法はない。

### おわりに

本稿発表の舞台裏を晒せば、2010（平成22）年度から2011（平成23）年度にかけての段階ですではほぼ脱稿していたものである。その後の人事異動等により入稿に向けて原稿を整えることなく手元に置いたままであったが、そこに至るまでの間、石井寛氏の一連の論考、具体的には『前高山遺跡』における前高山遺跡・小丸遺跡・小高見遺跡の分析（石井2001）、『高山遺跡』における小規模集落址の分析（石井2004）、港北ニュータウン地域の中期集落址の分析（石井2010）に大いに触発され、筆者の土坑覆土に関する実例（加納1998）と具体的な展開（加納2012）を公表したこともあり、一念発起し、今回、加除筆を行い、ようやく目の目を見ることになった。

発表の契機となった一連の論考を発表している石井氏には、日頃の学恩も含め深く感謝申し上げる次第であります。

なお、本稿での図版作成から既に10年近くの時が流れたが、図版の浄書に際しては小倉美和子氏の尽力があったことを明記しておきたい。

### 注

1) 報告書の抄録では、中期末の住居跡について13軒との記載がある。今回一覧表に記した18軒との5軒の齟齬について、炉跡として報告されているD-009・D-010、後期として報告されているD-027の計3軒の他、おそらく出土遺物から判断した以下の4軒のうちの2軒が、報告の段階で中期末とは捉えなかったものと考えられる。どの2軒であるのかは報告に明記されていないので、参考としてこの4軒における遺物に関する記載を再録しておきたい。

D-006 「確実に本跡に伴うと思われるものはない」

D-029 「小片がほとんどで図示できるものはない」

D-031 「炉内から縄文土器小片が少量出土したに過ぎない」

D-032 「ほとんど出土していない」

2) 後期に属する可能性のあるP-028、歴史時代に下る可能性があるP-744の2基については、加曾利E式期の可能性を捨てきれないものとして表に含めた。

P-027、P-130A・B号土坑については、報告書中で陥穴の可能性があるとことから、今回の分析の対象からはずした。

P-032・043・124・331・353・433号土坑については、2基の重複が認められる土坑であるが、調査番号では枝番を付与していない。今回の分析に際してA・Bの枝番を付与した。

D-031の炉と捉えられていた穴（径130cm、深さ90cm）をP-1001として、D-032の炉と捉えられていた穴（径120cm、深さ40cm）をP-1002として、本稿を草するに際して新たに4桁の番号を付与した。

B地区北で発見された2基（P-187・188）、C地区で発見された1基（P-498）は具体的な分析の対象にはしていない。

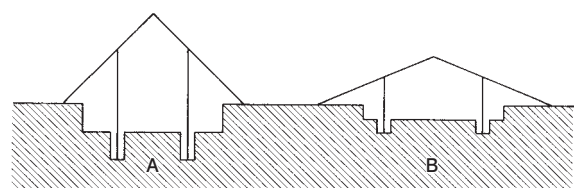
3) 124BはAのテラス部と捉えられているので、底面の凹凸の記述の対象外である。

4) 371は小形磨製石斧を副葬の可能性のあるものとした。568は埋設土器を副葬の可能性のあるものとした。

5) なお蛇足ではあるが、筆者の編年観（加納1989b）の提示からは約30年の時を経ており、その後の新資料の飛躍的な増加を鑑み、稿を新たにすることを予定である。これは筆者が加曾利EⅢ式土器新段階と捉える千葉市中野僧御堂遺跡（財）千葉県文化財センター1977）第8号住居址出土の2個体の土器についての再検討による、下総台地における加曾利EⅣ式土器の定義づけが、今後の集落分析における時間軸の設定において課題となっている状況を踏まえたことによる。

6) ここで用いる「場面」という表記は、「考古学の地平グループ」が用いる「フェイズ」という用語に概ね相当する（例えば小林2019）。土器研究における段階・時期という用語とは区別できる日本語として、仮に「場面」という用語を用いている。

7) 第9図において近接する住居跡について、堅穴の掘込み（もしくは想定される掘込み）相互の距離を記した。概ね3.5m～4.5mの距離を有するものについて、「近接する住居跡・同時存在に疑問がある住居跡」として示した。この数字について明確な根拠があるわけではなく、あくまでも感覚的なものである。ただし「住居跡の小型化と掘り込みが浅くなる点に再度注目してみると、—中略—上屋垂木の接地点は住居跡の掘り込み範囲を大きくこえることになり、必然的に入口部は住居主体部の掘り込みよりも外部へと張り出す形とならざるを得ない」（石井1998）という見解に立脚し、さらに加曾利EⅢ式土器古段階程度から顕在化する柱穴深度が浅くなる傾向（加納1995）を鑑み、柱穴深度と柱穴の長さに相関関係（深い柱穴と長い柱材／浅い柱穴と短い柱材）があるならば、上屋の



第18図 柱穴深度/堅穴掘込範囲/上屋接地面の関係

接地面が従前のもの(A)に比べ外側に広がる(B)可能性が高い(第18図)ことから、現段階において、この“近接する住居跡・同時存在に疑問がある住居跡”についての本分析における基準について、堅穴の掘込み(もしくは想定される掘込み)相互の距離を、暫定的に概ね3.5m~4.5mの距離を有するもの、とした。

また、石井は、前高山遺跡の2軒の住居跡間の5mという距離について「この間隔は上屋の接触に関する問題はないと思われるが、同時存在とするには、やはり微妙な間隔である」としている。その根拠として「前高山遺跡全体を見渡した場合、ほとんどの堅穴住居址群がかなりの間隔を置いて」いることから、「他の堅穴住居址相互の間隔に眼を向けるべきとの姿勢をとりたい」としている(石井2001)。

- 8) ただし、100m以上の距離を置いたところでの移動については、「同一箇所を構築を繰り返して構わない筈で、135mもの距離を移動する必要はないとすべき」(石井2001)、「150mもの距離を1回だけの構築を繰り返しながら移動するというのは不自然である」(石井2004)との指摘もあり、この距離での移動には懐疑的な要素がつきまとう。
- 9) この強引な分類には多くの反論があることは重々承知している。さまざまな実体を想定した上での強引な分類であることを自覚しつつ、強調しておきたい。この様々な実体の想定については、やや冗長になるが、(加納2012)での想定を以下に再録しておきたい。

#### 貯蔵穴／自然堆積

#### 墓 坑／人為的堆積

という単純な対照を想定することができる。

しかしながらこの単純な想定は、いくつかの実態を想定した場合の齟齬を認めざるを得ない。よってここでは土坑の機能／堆積の実態／覆土の観察、という3つの視点を織り交ぜた想定を、貯蔵穴と墓坑に分けていくつか示してみたい。

#### 貯蔵穴①

貯蔵穴の利用停止の後に、これらを開口したままで放置することは日常生活において不便なのではないか。多くの場合は埋め戻すのではなからうか。この場合、完全に上面まで埋め戻すのであろうか。支障のない程度に埋め戻す場合もあったのではなかろうか。このような例の検証においては、発掘調査での遺構確認面と当時の地表面のレベル(標高)の差異を加味しなければならない。

#### 貯蔵穴②

上記の貯蔵穴の利用停止の大きな要因としては、掘込み壁面の一定程度の崩壊により貯蔵穴が機能しなくなった場合を想定できるが、崩壊土が土坑の深さの一定量を占めるならば、埋め戻さない場合があったのではなかろうか。

#### 貯蔵穴③

集落の移動に伴い貯蔵穴を利用しなくなれば、貯蔵穴をそのまま放置すると考えることができよう。逆に、移動に伴う貯蔵穴の意図的な埋め戻しというような行為があったことも想定できよう。

#### 貯蔵穴④

自然堆積の途中の貯蔵穴の凹みを掘り返して、貯蔵穴として再利用した場合もあるのではないか。その場合、完全に掘り返す場合と、途中まで掘り返す場合があったのではないか。

#### 貯蔵穴⑤

貯蔵物の隠蔽や温度・湿度管理等のために、貯蔵物の貯蔵後すぐに埋め戻すような貯蔵穴もあるのではないか。

#### 墓坑①

自然堆積の途中の貯蔵穴の凹みを掘り返して、墓穴として再利用する場合もあるのではないか。埋め戻した貯蔵穴の墓坑への再利用もあるのではないか。

#### 墓坑②

墓坑の遺体の上に土を被せない埋葬方法があったのではなからうか。また埋葬に際し、開口部まで必ず土を被せたのであろうか。遺体を簡単に隠す程度の埋葬があったのではないか。その場合、開口面と遺体直上面の間は自然堆積になるのではないか。

#### 墓坑③

埋葬後の遺体の腐食等により陥没が生じ、これにより生じた墓坑上面のくぼみへの自然堆積が想定できるのではないか。また、墓坑の上部に土饅頭状の盛り上がりがあったのなら、くぼみは生じないのではないか。

#### 引用・参考文献

- 石井 寛 1998「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 2001『前高山遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井 寛 2004『高山遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 2010「縄文時代の遺跡群と地域集団-港北ニュータウン地域の遺跡群研究から-」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL.14
- 石井 寛 2014「縄文中期から後期への推移に関する一考察-港北N.T.遺跡群を対象に-」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL.18
- 井上文男 1989『林台遺跡』柏市教育委員会
- 宇佐美哲也 2012「武蔵野台地東辺における縄文時代中期の集落景観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第172集
- 大内千年 1997「第4章 調査の成果-まとめと今後の課題-」『辻遺跡』山武町教育委員会
- 大内千年 2006「第6章第1節 縄文時代」『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-市原市中潤ヶ広遺跡(上層)-』(財)千葉県教育振興財団
- 大内千年 2008「千葉県における小規模集落の分析-中期後葉土器編年に関する補足-市原市中潤ヶ広遺跡の事例を手がかりに-」『縄文研究の新地平(続)~堅穴住居・集落調査のリサーチデザイン~』六一書房
- 加納 実ほか 1989a『小中台(2)遺跡・新掘込遺跡・馬場遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 加納 実 1989b「千葉県における加曾利E式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所

加納 実 1994「加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市加曾利貝塚博物館

加納 実 1995「下総台地における加曾利EⅢ式期の諸問題－集落の成立に関する予察を中心に－」『研究紀要』16（財）千葉県文化財センター

加納 実 1998「第5章まとめ 第1節土坑の機能類推に関わる視点」『市原市武士遺跡2』第3分冊（財）千葉県文化財センター

加納 実 2000「集落的居住の崩壊と再編成－縄文中・後期集落への接近方法－」『先史考古学論集』第9集

加納 実 2002「非居住域への分散居住が示す社会」『縄文社会論』（上）同成社

加納 実 2007「縄文社会崩壊のプロセス」『千葉県の歴史』通史編 原始・古代1 千葉県

加納 実 2012「土坑の機能類推に関わる一視点」『縄文時代』第23号 縄文時代文化研究会

上守秀明 1992「終章 調査の成果 第1節 多田遺跡出土土器にみる加曾利E式後半の様相」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区4）』（財）千葉県文化財センター

北長山野遺跡調査会 1990『東・北長山野遺跡』

小林謙一 1999「縄文時代中期集落における一時的集落景観の

復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集

小林謙一 2019「縄文土器編年研究の方向性－南西関東地方縄文中期を題材に－」『考古学の地平Ⅱ－縄文時代中期の土器論と生業研究の新視点－』山本典幸・考古学の地平グループ編 六一書房

（財）印旛郡市文化財センター 1989『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）千葉県成田市長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』

（財）山武郡市文化財センター 1995『居合台遺跡』

（財）千葉県文化財センター 1977『千葉県中野僧御堂遺跡』

（財）千葉県文化財センター 1982『主要地方道成田松尾線V中台貝塚 松尾東雲遺跡 八田太田台遺跡』

（財）千葉県文化財センター 1998『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1－山武郡芝山町古宿・上谷遺跡－』

（財）千葉県文化財センター 1998『市原市武士遺跡2』境遺跡発掘調査団1980『千葉県山武郡芝山町 境遺跡発掘調査報告書－第Ⅰ・Ⅱ地点－』

パリオサーヴェイ株式会社1998「付章6 武士遺跡検出土坑の性格推定のための自然化学分析」『市原市武士遺跡2』第3分冊（財）千葉県文化財センター

第1表 住居跡一覧表

番号	特徴	炉	出土土器からの設営時期	その他
D-001	柱穴無し	埋甕炉残存	加曾利EⅢ式期古段階	P-049上に炉を設営
D-002		斜位土器埋設	加曾利EⅢ式期古段階	
D-004	建替え	炉重複	加曾利EⅢ式期古段階	
D-005		埋甕炉残存	加曾利EⅢ式期古段階	
D-006			出土土器なし	
D-007		埋甕炉抜取り	加曾利EⅢ式期新段階	
D-008		埋甕炉抜取り	(加曾利EⅢ式期古段階)	P-009（EⅢ古）が炉を壊す
D-009	炉のみ		小片出土・図示なし	
D-010	炉のみ		2点出土・図示なし	
D-012	2本柱穴	埋甕炉抜取り	加曾利EⅢ式期古段階	
D-026			加曾利EⅢ式期古段階	
D-027			加曾利B式期	
D-028			(加曾利EⅢ式期古段階)	P-345（EⅢ古）が炉を壊す
D-029	2本柱穴	埋甕炉抜取り	小片出土・図示なし	
D-030			加曾利EⅢ式期古段階	P-384は貼床下
D-031			炉跡から小片・図示なし	P-1006が炉を壊す
D-032			ほとんど出土していない	
D-033		複構造炉	加曾利EⅢ式期古段階	

第2表 土坑一覧表(1)

No	フラスコ状土坑と捉えた根拠	覆土の状況	坑底面の状態	堆積状況	土器等出土状況	区
003					集中	A地区
004			平坦		0	A地区
005A						A地区
005B						A地区
006					0	A地区
007						A地区
009	写真図版					A地区
010						A地区
011						A地区
012					浮島式3点	A地区
013A					120点	A地区
013B						A地区
014						A地区
016					0	A地区
017					80点 EⅢ新	A地区
018						A地区
019					120点 EⅢ新	A地区
021					?	A地区
022					0	A地区
023						A地区
024						A地区
026						A地区
028				埋戻し	安行1式わずか	A地区
029		黒色土単一層				A地区
030						A地区
031						A地区
032A	写真図版					A地区
032B						A地区
034					0	A地区
035						A地区
036			凹凸		0	A地区
037					0	A地区
038					0	A地区
039						A地区
040		上層にローム多い				A地区
041					0	A地区
042					0	A地区
043A						A地区
043B					?	A地区
044					0	A地区
046			平坦			A地区
048						A地区
049						A地区
050				埋戻し		A地区
051						A地区
052		不自然な堆積状況			0	A地区
053						A地区
055					0	A地区
118			ピット			D地区
119A			平坦			D地区
119B	写真図版		平坦			D地区
120	実測図					D地区
121						D地区
124A	写真図版		凹凸		0	D地区
124B					0	D地区
187	事実記載					B地区北
188		上層に焼土				B地区北
328			平坦		0	A地区
330				自然堆積		A地区
331A						A地区
331B						A地区
332						A地区
334						A地区
335	事実記載				0	A地区
336						A地区
337						A地区
338			凹凸			A地区
341			凹凸			A地区
342	写真図版					A地区
343	写真図版					A地区
345					大破片	A地区
347					0	A地区
350					0	A地区
353A	事実記載					A地区
353B						A地区

第3表 土坑一覧表(2)

No	フラスコ状土坑と捉えた根拠	覆土の状況	坑底面の状態	堆積状況	土器等出土状況	区
354						A地区
355						A地区
356			平坦			A地区
363			平坦			0 A地区
364	写真図版					A地区
365	写真図版	ロームの混入無し				0 A地区
366						A地区
367						A地区
368						A地区
369		単一層				0 A地区
371		単一層				A地区
375						A地区
379						0 A地区
380						A地区
382						A地区
384		上層にD-030貼床	平坦			0 A地区
394						A地区
395						A地区
397		上層にローム多い 互層	平坦			A地区
398		上層にローム多い	凹凸	埋戻し		A地区
408						0 A地区
423						0 A地区
424						0 A地区
425						A地区
428						A地区
431			中央高まり			A地区
433A		上層にローム多い				A地区
433B						A地区
434						A地区
450		ロームの混入無し				A地区
452			凹凸			A地区
453						A地区
455						A地区
456						A地区
457			中央高まり			A地区
459						A地区
460			平坦			A地区
462						A地区
463			凹凸			A地区
464						0 A地区
465						A地区
466		ロームの混入無し				0 A地区
490						A地区
491A						A地区
491B						A地区
498					早期条痕文わずか	C地区
524	事実記載					A地区
525	事実記載					A地区
537	事実記載	暗褐色土単一層				A地区
541						A地区
544						0 A地区
554						A地区
558						A地区
560		上層にローム多い				A地区
567	事実記載	上層にローム多い			集積 EIII新	A地区
568	写真図版				土器埋設 多い	A地区
569						A地区
603						A地区
608						A地区
609						A地区
611						A地区
613						A地区
620						A地区
621						A地区
622						A地区
629						0 A地区
631						A地区
674						0 A地区
689						A地区
733					単独の埋甕	A地区
744					縄文式土器・土師器混在	A地区
764						A地区
1001						A地区
1002						A地区